

English Garden 第28話

"The course of true love never did run smooth" William Shakespeare

「まことの恋が平穩無事に進んだためしはない」 ウィリアム・シェイクスピア

妖精の出でくる劇として日本でも人気の高いシェイクスピアの喜劇 "A Midsummer Nigh's Dream" 「夏の夜の夢」の一節です(小島田雄志訳)。midsummer dayとは夏至の日で6月24日、St.John's day(聖ヨハネ祭)でもあります。イギリスでは "June Bride" という言葉もあるくらい6月は気候の良い時期で、この劇は宮廷内で行われることになった身分の高い人の結婚式のために書かれたものであろうという説が有力です。

聖ヨハネ祭の夜には青年男女が森に行き花や薬草を摘んだり、花輪を作って恋人に贈ったりする習慣がありました。この夜は眠ると魂が肉体から遊離して迷い出るとか、種々の前兆を含んだ夢を見るなども信じられていました。この民間信仰はキリスト教よりも古い原始宗教に属するものです。もともと夏至の祭は地母神の祭であり、この夜は植物の精である妖精が現れ、薬草は成長のもっとも盛んな夏至の夜に特別な効能を持つと信じられ、人びとは祝いの火を焚いて酒を飲んだり余興をしたりして底抜け騒ぎをしたようです。そんな夜にふさわしい夢幻劇として、この題名がつけられたといわれています。



こうした劇では、当然「愛」がテーマとなります。表題の言葉は、アテネの貴族ライサンダーが相思相愛のハーミアと交わす会話の一部です。ハーミアの父はこの結婚に反対して、娘を自分のお気に入りのディミートリアス(ハーミアを深く愛しているがハーミアには嫌われている)に嫁がせようとし、さもなければ死刑が修道院行きだと宣告します。愛の難しさを嘆くライサンダーの言葉の続きをもう少しご紹介しましょう。

if there were a sympathy in choice,
War,death,or sickness did lay siege to it,
Makin it momentany as a sound,
Swift as shadow,short as any dream;
So quick bright things come to confusion.
せっかく選んだ相手と結ばれても
戦争とか死とか病気とかに襲いかかれて、
恋はたちまち消えてしまうのだ、音よりも
はかなく、影よりもすばやく、夢よりも短く。
このように美しいものはたちまち滅びるのだ。

そこで二人はアテネの法律のとどかない田舎に逃げようと、町から1マイル離れた森でア落ち合う約束をしました。ハーミアはこのことを親友のヘレナに話します。ヘレナはディミートリアスに恋をしているのに見向きもされないのを嘆いており、この計画をディミートリアスに話してハーミアを追わせ、自分も彼を追って森に行くことにしました。このときのヘレナのセリフにもなかなか気の利いたものがあります。

Love looks not with the eyes,but with the mind;
And therefore is wing'dCupid painted blind:
Nor hath Love's mind of any judgement taste;
恋は目でもものを見るのではない、心で見る、
だから翼もつキュービッドは盲に描かれている。
恋の心にはどこをさがしても分別などない。